五元集 [illegible]

[illegible]

是より別して掃賀を尽
し彩の心は英雄乃臣を以
て誠をもちるを所神妙也
邪境の祭のる第一
成るしるして白綿つきの
放ちる東はお坂山南は
立田西は穴生小は有乳
乃鎮護をはらそ先一ツ
の彩書を認ちる
治雞坊乃何某筆を
取て田饒の詞をかり蘇
祭り謀を顕して神明

藤井氏收藏

納受の志を乃ふ
南の清水を汲うつして頂禮
ゆうをも

三十六合

春風の心かなるまもりも家雞乃麓
二字より次
佛節會ゆ當日をたの西の家鴨爲　底下
見よりをの音乃新年歌仙
乃左坐年のゝとはらる空の天鶏

年齡をふるを軍配ゆ云
曲をつくるをしらう
右ゆ地たの西の春震
うをとんすて旅丁と称をと紀を
なる家鴨爲立ちすして
牝雞乃新々西ゆく押るゆ
留主居役ゆ付らを支切て
附ゆ其身の立居重く大
声をあるをて勤番ある也
道戯て あひる傳兵衛とて
ゆ乃笑ひをの
なるを

卅七合

桃花雨を竹の葉乃みさゝれ足　其角
二字トス

五六間迯てゝ西に尾ぬき
し字と成

清明の節大雨ときて思ふ
敗軍次稲麻竹葦に入乱
ゆゝ色の赤さゝ尾ぬきかゝり
何ものゝ赤さゝ尾ぬきかゝり落書
雞去て昼竹葉とゝ白を書
捨ゝ昼ゝ山汎の僧雪乃
鶏白て犬走生梅花とゝ

對たゝを時ふゝて用ひる
とゝ桃花雨ふゝ羽翼
ハ醜しとゝ
男涙乃ゝ晴て後
ゝゝ尾を
乃鶏立ゝ
卅八合

白綿付乃黒て仕て取ル巳日ゝ
乙字

桃節ゝ
也
異出乃男白綾のふゝ

生けてをんを出すれしるしの願角
力のかぎりなるらん酒陶氏とるんゆるう
立髪枝乃兼にちさみなり胴骨
つんりとしび四斗樽のとくれく
ふるふる桃花の酔ちゑとヒ乃
日の精を得力量いくならん
卅九合

くゝ鳴胴距をしる　鳥甲
捕距部
鶏冠を色並をなとて擬もお　素春
ひ字
中入して手をかけるふか房乃

後見ん法心得ぬ業也冨士の煙
乃かひ物なるかんかひなく歯のみ
きらをたる牝雞晨鳴をし
ひさはいみとをとを伝と伝を象も
ら〳〵先をうを鹿必なるといふる詞を
ちをそれ擬も心をつけて先く
しむ乃ー力乃出る寂中なるを
四十合

茶筅尾を鑽をたくいさみの丸　習奥
左右ひ字
流おまをと當うく　みも　距　於　其角

茶瓶類にうるる尾にうるる
二十二番の方もうるるも手弱き
方也ものてかつしの雑言ハ
崩口ちうるる
四十一合

鼻ふうを味方へ引や番　椒　雪花
也とる

油の殿空辭ハてうる庭　堂
二字
嚴ゑの水ゑ舌ハし三伏の番椒
に鼻ゑ汗ハ辛烈の氣忽ち
頂平へ至りてあるふ血のるる

男寒相撲急ゑ手ハ
味ハ可へハうへてもうるるう
空辭してつきたるハ次ハもあり
それハ不ハの心うけるハいとり
ハけて未意とをね也
ハッ立七ッ起ハ関の東の兵
四十二合

兵と郷もハるるトミ呼ひ　何肛
二字ハ次
延田鶴の鸚口ハ丸の負て傍
桃李不言の詩兵と糜美の上

うらハ艸木をたゝひ行る一言誠ま
かしけ原トミとのひ出されて
桟鋪より此花をゝ原ゝ
足田の野の中茶ハ伊勢の国
是乃裏ハなまりきいちゝくゝゝ 慈鎮
はゝよせてもゝ洗ハゝゝ
成乃高さに松詞を置れゝり
はゝつくゝゝの法ゝともいゝとゝ
鞠花のともいひつけ侍とゝ和
きゝゝゝうゝゝ花の原をゝゝ
繪なるゝゝとの評判かゝゝ
法家乃ゝん世界なかゝらる

卯十三合

いとかき木乃芽をゝく距ゝ右此

胡葱はゝゝゝゝ三字ゝ次もなり 稽古問
是彼子用ゝ原ゝもなゝゝと
雞乃坊主ゝゝゝ若ゝゝ 間指
先蹤正ゝゝゝゝ双ゝゝ
垣を魚ゝて問を合ゝゝ
なゝゝとゝの人ゝゝまゝ成ゝ
右ハ時節お應乃むゝゝ世也

頁手八味噌をつまるとりつも
いかにもきく巧言世方この糜貶呂
なるをていはば酢乃過きしると
言られぬるをそれをもそれ

砂味噌

廿四合

八乃字の字の寄事て馨醒

左右乙字

肴利を毋ひのゆえ蚯蚓 丈 吾子

醉といひさたとりつ好悪の

詞ゆして心ふうるりなるもの

朱冠ひよくるを距受弗なるを

ひふるものの性得自然すくく

ぬるひなるふ入河津殿の貸ふ

一万箱王毋ふのるれるを甘毋唐方を

備えて毋衣とりつ羽袴をもを

るたるふ樊噌をもなるむ

十本のるふ

卯十五合

血盲乃幾直字の俵受ぬ寄耕篭 椿孤

毛

尾雫も緋桃ふ添てるるいう 百猿

二字ふ

雞籠の山路をゆくる日幾
たゝび聞こゝろてらみて音を
啼くつをみちのしく蜜柑の皮春の
綱代の重ねをかゝる籠に入られ
見をつくして三月と知る日晴かり
血盲也若武者ゝたゝも目や
かけ作るもをかゝ冠をきそ出を
て紅桃乃梁もねしむ色也
冠重呉天雪ふりかゝて
楚地乃花もをかしくる
かとい色て後しるるんう
平十六合

撫物を此羽乃平ゝ難波寺
二字ゝ
南京乃引音を猛て水や空毎閑
乙字ゝ
天王ちの拾遺後記みゝ
所大坂矮雞の乃ゝ丈手に
なしゝゝ今とも見羽の
乃尾なゝ白ゝ也煙き
是源氏の墻ゝ南京の小太郎
ゆゝ丈ちといられて尋常や
引音を猛大鼓を合ちゝ
中ゝれい水天色のて千ゝ

乃反ふかうの関路の名も
声くに[illegible]
四十七合

足病乃かゝしは事や 腎 被 花月
乙字

朱冠癰に洞ヲ三月待れ名
鳥医四の曰足やみ乃ゝ手
腎折 失盡てきむ方乃
是當分乃弱き色ゝ手なら
あつかゝ乃名ゝ冠癰布宵に
しゝ六ケ舗病や営皇と病

鷹氣欝に寒苦鳥風寒乃
多ゝ良藥を得名ゝ此
ゝて此病なると漢家乃
むゝ至癰怒の毒第に
乃多ゝ名ゝ名ゝの色
きゝく命運を全して
かゝねて軍ゝ名ゝ
四十八合

脚を蹴て巴を負ゝ脂気 喰 笹分
乙字
[illegible]
[illegible]二人 静を合名ゝ
戴冠文

[illegible]七篇の中
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]三芳野の奥に
[illegible]放[illegible]美雑[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
甲十九合

沼津より足高山へ　大槽　土朝
[illegible]
[illegible]
二[illegible]
清[illegible]の関取り血脉原言[illegible]を
[illegible]宿[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

竹の芳野唐土のうつ名を
翅ゐ薫物し紅粉化粧して
花美をふ人の心をかたぶけ
迷をを知るに後法度ゐ除て
ものもみな放ちやらぬかの
箒木の義を
身のうしをあけくれふるそ的の秋ふ
とりかさまてを音もちのれる
うつをみ乃奇也世ふ
とを

五十合

傍口ゐ推るも啄くも嵩て門
戴冠文トス
傳大士を雞驚うゑひ〻晩合 依以
今ハ寺こ乃雞を召ゑ推敲
三年の執ゐすて推ハ力啄り
ハ品也韓退之是を相手
て以鳥鳴春と世上ゐ〻りてを
ら〻ら〻輪藏乃三影う
ゐきゐをを刻て空ゑ
きゐて場ゐ〻〻とんつをつ
乃狂ひうを笑へ

五十一合

柏手のかつ色をとかハ臭負　辰下
左右色とられ
尾とる影　落　雜　百之

社頭ハ雜かすき寄合此
をきつたんとの柏手ハ松柏の
霜の後をきをとるも各浪人
角力ハ笑ものの
神山乃柏乃平手をとるを
樂番もし

五十二合

唯狂ハ血臭ひ背を代　雪花
五字
顋　罪凡赤ちハ　酒乃いとかも　雪花
捕距武
ハ也ハ　ハ也言しかる業を
得て舞ハ　ハとひ瀧とハ傘
ハ　ハ　きをもを
月ハ床冠　ハ乃ハ
出ハ顋　ハ今ハ
此鬼酒を力　共かれハ佛力
ハ神力を

五十三合

[illegible]

左右乙字

筋鞘乃破軍を[illegible]花の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花[illegible]桃花乃陣を[illegible]

五十四合

引色も日出の煤乃塒鴉

五字

相運羅乃勢を越や花曇り　習奥

[illegible]

羽色とかよ[illegible]

日頃の袖[illegible]

向上乃[illegible]

[illegible]明王の眼を驚[illegible]

[illegible]

一[illegible]

五十五合

雞頭の追手に粱の紅葉　筋分

也

土餅　豆腐　君より獻　鳥子

二對の名目は立ちうつなはなして

はなちつるぬ所なり是に

雞頭也同しきしの紅葉頁

とりなふ丈品ものれ作る色

紅葉鳥鹿ふかきうるてうれ

新家の図者場を食ひてを

乃うとうるふをんうに力　紫

角力の外他事はなし土

餅とりふるる　豆腐の和うるる

葛菊の白きもなし

五十六合

時下に後海もなり蹴合始百懐

こ字右二ふ字

堀地乃眼を臑の鉄輪お

むうるふる樽の下にのなり

て瞳ふる丁物目をさなれ

丁度〜也しう食つきて

時下りしうをおるしう

空腹の体負後悔すべし
三足のかゝと輪を世の中の宝
ものにたかむとをもへ
功をゝみぬ中古野出の亥三郎
と云ものの片腕を切られ骨を
皮引かるゝをてんらくかゝしを
騙すと肝の根より引切て捨
ゝ素門ともふて片枝と呼ス
此意地なかゝを
五十七合
欠仏乎赤乃根撰や若干合其角

砌水ふ走尾捕距武息をそ古湘江
昌子赤の根なくと猴叩方のいし
子負後たてしも道理古湘江
昔仮正乃唐織をしつ者
邪慢京慢ゝ手ふつそ三番お
ゝゝ此男呂死みゝらいゝ
難ぬし
五十八合
雌ゝ毛虫を捌く羽癖や表
也

卆八

いさかひ乃別まで唱ふ昼下り　雪花

潛確類書に雞ハ蜈蚣を以
酒とし蟾ハ桑椹を酒とすと
其妻酔臭乃羽癖をつく
酒乃もしみすまかしくんて
さり左へ廻る手しや茶白
あしらふもとかしこらん
たは楽急がまぬるとなくより
早天から乃見物待ち卧
しらむ角力揃ひなひのま
なつる別まてらふ是

廿十九谷

風呂乃つまり大あくび一個ゝ　其角
　も右乙
勝手不独ハねや雄乃役
甲の志ら鶏毛をつみ上る總
首隨欲雞鬼也こなしに
あゆむその振乃源平よまて
野ヲ伏山ヲ卧とる白髪の源氏
にそえてかつの示をかくとる掬て
寛竟の左忽ニ尻ま拝しつ源氏
舞のあそむき志とろまろまて

瓢鷺〳〵る風情

六十日　　苦〳〵

絢突乃時をも同をんなを独楽
戴冠文と決右五字トス
ちゝ玉小結み連ムまゝ　鬢　白橋

韋駄天乃名ゝ為ものとと
引廻しともの下界へ投ゝ
ちゝは考〳〵う胸を突て絶
入〳〵滑まれ洞る大独楽乃
〳〵と乃泡とゝゝをゝ

花月惣一
ちはにものの辮雑合ゝ和
てちゝて肝をゝゝゝる
六十一台

髪ゝの厩かゝ出て鳥いゝ
五字
噫にも如ゝとゝる鳥　伯樂　毎用

七乃前迄はゝゝゝゝ
真黒ゝ毛曝関内もと乃
帝意をゝふゝり作ゝ乃
ゝとかけ乃ゝ末口世界

国土平安の為に
次伸嘘噫心をつをて行相
を乃ち長伯樂乃煉磨也
さるの乃手入今日のつくを為 襟
裾をかさり立さる不當坐はた
夫ふ毛ゝ也ゝ化ひらをれるく
鵬乃餅ゝし
六十二品
我が乃屋敷を相手やすつゝ岡
乙ふとに
今日の関篭を狂しかゝ崎芳
五字ゝに

伊勢町小田原甲雛犬ともの
中何ゝ木戸を限つて取合か
童僕の心も亦去かりうゝ
獨遊びをすれば惣ゝのちふ
ゝ者とす年比日頃乃意趣を
含て呉越乃名主を煩らは
ゝ〳〵〳〵繁花長安乃
江戸気すて飽点にゝて肥る
ゆゝ也
或人乃いゝ言るゝ信濃の国大兵也
其郎もれ年毎ゝ乃ゝとしいゝ
ゝ民越後乃国荷を荷ひもて

川中島の手合をんとるや
龍而乃成漢楚の爭ひ是
を事世の哉とする
六十三合

聯白をうひ矢壺くる辰下
乙字

抱刀て凡乃洗足をゝ雛北酒百之

たゝ〻箭合也をのとりく
羽に扎成つをて放をとるく
ゆゝるゝるの一ものあるに
手掛りつなゝひ喰ふ

乱世て北い抱分くるもの
走るゝ凡のをををんとを酒
ひくりに成しはつゝ
逢者あうゝ心をゝ
油乃大敵
六十四合

塒をゝ乃いさもや桃乃花振ひ立朝
乙字

碁盤もこいさ亟谷へ彌三五郎

塒をゝ乃己の対わゝへ——て
他の悪黨をを次霄くるの霄

鶏八声の鶏頭ある者一名
孟嘗君の手の如くいかさまもさり
しに共手ふるとてとなりぬ
手色つらつら雞術　三千の
客珍越こうさしを獻流
人形乃名をつかす飛彈乃
掾と受領を給る乃
昔のたつをく聲をたかく今乃
しつみい形を工みもう秋廣
乃色例を以て寶永の
史記に書ものきぬ亀ふれ
鶏ひつ見い鶏ひつ也

羽多は羽形なるべく
難波は名二羽とも番へ
六十五合
尾狂ふ尾ふるとなるは逆毛ふ
左右乙字
鶏過ぎ　浅黄ふあるて月士軍　雪花
尾狂ふ尾ふるとなるは
雞乃獅子はふるく逆毛況
此句とふの毛ふ所と亦ふ赤練
みも中ふ也尾狂ひ乃狐あよ
なるとし逆毛ふ也とひ

[illegible]は首尾十分なる意を
を十五年以前の若氣にて
[illegible]
口とふるもの牛後となるを
ふうれいなる詞つくるを
鳥主も傷損きのを凋
表裏あるく仕立紫しらう心の
濃きうすはむらまなるうん
六十六合

撮距小荷試奉行ハ隱密なる習奥
[illegible]

くハ蔵を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]
軍旗[illegible]用ひ[illegible]
書付[illegible]る中まハ小荷駄
かゝ[illegible]の作候[illegible]の此陣にて
つもり[illegible]つ[illegible]
矮[illegible]
くハ落を[illegible]
坂落下[illegible]曹司[illegible]ハ主[illegible]
得て[illegible]は損[illegible]
[illegible]
経[illegible]

三十騎ばかりと志先かけて落縄
拂おとしの出立落されしらるも理りと
夜軍いかかふて是を分目
のこゝろとゝめてし
秘傳乃事ハ
六十七合
力尾の旗のひらめくも猶くみ百之
二字
なとゝ坂の番てゝをく帝後ハ
徐開引音を合を味方乃糸冠
をゝ詰てなとゝ山へ入のこゝろ

収りの舞羽を引るかゝを起
おとゝ屠をれとゝも猶の一道
力尾の合戦を引なけ
ゝちらにてゝく踊ちら
関乃ハ神乃郷前ゝ
謹上再拝奉
六十八合
陸奥殿乃鎧ゝ着なんていゝ合
五字
犯(ツクル)鶏心の後ゝ
二字
白兄乃先陣後陣分
秘土儀著

はしきかつるもはやのうつ八ヶ負
とかもとり詞平和さらに窓
是社ぶさふはうして白士舞
あるそりし市若者心のごとく
て御陣屋までもあらし相撲
をとり踊りなどてはやし
なりとくそれは一条目の制札
ありて叔俵より外へ入るを
うらはとも去とても志まくの中
とも多りれを許すあるにた
六十九台

百士乃顔もよすまする門屋哉
戴尉文
火啄やはふさつ下に臆病も　無聞
二字
落足手負者はなく鳴て駒の
蹄はついてちりうせるあり
さるの纔乃尾をふる犬乃口を
のがれしは然迄悲心仏
迯俺のあやけものたれと三井なる
みつきめりは月前鳥
啼て智己は満所これ
篝火消えさもいしらるかし

乃の毒もむる焼塞の雉峯は
おるるるくけのつつ咲乱
て寒食乃家を気つゝ
身乃上いるもさきを花ゝ
異国乃火のすむ多なる
今此生鳥ともく屎を山吹ふ
をもて艶を根ゝ肉ムラを大根よ
おゝ一ゝく銀書を刻おもしむも
前世乃業肉をつゝふ化
人乃ゝをもをて涙のゝね
をゝつ一もしのもも
去ゝ形ゝ重

七十八合

一番乃勝を佐久間ゝ吹流ゝ　甚角

五字

もゝ見のかゝ欣雑なく十二揃

諫鼓苔深ゝ治雑坊乃
塵静せとしあるもの
法仲の力ちあ仏偏丈一番
乃条をつゝ発事る昌い
例年乃ゝあるもあのゝ萬
戸関を忘れゝ
もゝ見十二隠ゝ見十二なて

勝負を決する事十二文かくし
勢力になり此事委細に申さん
然の夜の千値をて和手なきり
ともに紫なりてなやなか
なんどの司なる貝銭桶に
かくれん鍬は箱弓は袋に水
引をとらせて鳥の跡を寳
とし正木のかつら永し
とりつる手の毛に時の
鼓をうちおさめ奉郷

鳥沙汰曰

慶安二年五月二日東山の
仙洞にて雑合の戯れあり
公卿侍従僧徒上下の心面の輩
常に平常候の老いも左右を
うかうかれ眼に賢木なうつて
名に枝に用いし八尺の銀臺
を居て藤の花をかざりし
二色橘樹薔薇牡丹山吹の
作り花をかざりあて冷人
參集して春開なる御堂
の山の青山のとうらしきて

笛笙を吹和琴を弾ずる
嗟歎乃舞樂を奏して
和両方乃雜を合せ

一番　左　右衛門督乃島家無名丸
右　五條大納言乃家千代丸

以上十二番左勝四番右勝六番
と記す哥女舞妓奥座敷
絶す此間盃を勧む祝儀
放宴といつても乃代乃

義談
おらつてお乃〳〵是を此事
中御門乃左大臣殿乃伝
つたへよりて奉行人經房
朝臣書・奉るなり其代
乃記なり合を伝るなり
なり
　　なるべきこれか奉て

花乃の　後撰
唐子　合せ

左右總計

麗人　二句
五字　十四句
三字戟　十八句
二字　卅六句
雁形乙　五十二羽
屯　十六距

寶晉齋其翁